

序

「処方する」ことは医師の仕事のなかで重要な一角を占めます。直接的な侵襲を伴う手技とは異なるものの、選択のしかたによっては毒にも薬にもなる「処方」。はじめて使う薬を処方するのが怖い、という気持ちは誰でも感じたことがあるのではないのでしょうか。

自分が研修医の頃、上級医の処方をノートに書き写して自分なりの処方ノートをつくっていました。また、自分が処方した薬もどんな患者さんに使った、というコメント付きでメモをとっていました。当時、一般的な教科書はあっても「何を選択したらよいのか」という具体的な処方のしかたまで踏み込んだ本は少なく、苦肉の策として上級医や自分の処方をメモするという愚直な方法をとったのだと思います。無論そのメモを今使うことはありませんが、そのメモを見ると緊張しながら処方をはじめて行った研修医や若手医師だった頃の気持ちを思い出します。同時に、処方は緊張するものであり、漫然と処方することは厳に慎まなければならない、という自身への戒めにもなっています。常に新しい情報を取り入れ、慎重に処方することはわれわれ全員にとって必要なことでしょう。

エビデンスやガイドラインに基づく処方は基本ですが、さらに現場で何を選ぶか、という観点で、現場の経験知は重要です。そこにベテランと若手医師のギャップがあります。なぜ、その処方を選ぶのか、という上級医の思考回路を若手医師が学べば、ベテランと若手医師のギャップは縮まり、若手医師の成長曲線はグッと上向くに違いありません。自分が若手の頃に本書があつたらどんなによかつただろう、と思います。

今回の分野および各分野でどの種類の薬剤について解説していただくか、についてはあくまでも「若手医師が1人で処方するときに参考になる」という視点で選ばせていただきました。また、執筆者は各分野のエキスパートであり、かつ若手の視点に立つてご指導いただける先生にご依頼させていただき、「研修医が知っておくべき基本、および若手医師が1人で処方することを念頭においた処方のしかたを概説ください」とお願いしました。

感染症の総論を執筆いただいた矢野（五味）晴美先生からは各論の執筆者を御推薦いただきましたが、「ベストメンバーの方々からの若手へのプレゼントです」というコメントをいただきました。まさに、本書のエッセンスが端的に示されており、本書は、執筆者の先生の知恵とメッセージに溢れた内容で、若手医師への知の継承でありプレゼントだと思います。はじめての処方は緊張するものですが、1人で処方するときにも、本書を手にとることで指導医の先生が語りかけ、その経験を伝えてくれるような存在になれば、と思っています。また、指導医の立場で本書を手にとられる場合は、若手

にどのように指導するか，という指導の助けにもなる内容にもなっているのではないで
しょうか。加えて，Advanced Lectureのコラムもご執筆いただいた稿もあり，指導医
やベテランの先生にも読みごたえがあり，特に知っておくべき分野について網羅的に
アップデートできる内容になっています。

山のようにある薬のなかからどのように選び，どのように使うか。このことは医師と
しての裁量を存分に発揮する場面であり，1つひとつを慎重に，また納得のできる処方
を行うことが医師としての実力を培うための王道なのでしょう。そのための一助になる
パートナーとなるような企画になれば幸いです。

2019年5月

岡山大学大学院 医歯薬総合研究科 地域医療人材育成講座
片岡仁美